

「農業技術の匠」：^{ところ}野老 ^{てるよ}昭代さん（千葉県山武郡大網白里町）

～ 稲と語らい60年 良質多収と気象変動に対応した米づくり ～



〔野老 昭代さん〕

1 技術確立の背景(目的)

昭和40年代、多収穫品種のトヨニシキに代わって、良食味品種のコシヒカリが導入されました。しかし、気象条件等による収量差が大きく、倒伏及びいもち病に弱いため、安定生産が望まれていました。そんな中、野老さんは女性ならではの細かな観察と記録を積み重ね、稲との語らいができる農業者として、「コシヒカリ10俵安定どり」の高品質安定多収穫技術を確立してきました。

2 技術概要(技術効果)

- (1) 観察と記録から生まれた米づくり技術で、稲の生理・生態を活かした「人が稲を育て、稲が米を作る」技術を確立しました。
- (2) コシヒカリ反収600kgを安定的に確保する収量構成要素目標を、①m²当たり穂数400本②1穂当たり粒数80粒③登熟歩合90%④千粒重22gに設定し実現しています。
- (3) 収量構成要素目標実現のポイントは、①健苗育成②早期有効茎確保③根の活力を保つ水管理④適期穂肥⑤病害虫予防の5つで、これらを細かな観察と記録により実践しています。

3 技術の地域への活用状況(普及状況)

山武郡市は九十九里平野を中心に水田面積が1万haを超える稲作地帯です。昭和40年代に土地改良と用排水事業が完了し、野老さんの稲作りの観察・記録も本格化しました。

昭和49年には、地元大網白里町農協だよりに、「稚苗植安定10俵どり」を紹介。昭和52年同農協稲作部会を結成し、副会長に就任。NHKテレビの「明るい農村」にも出演しました。

それからの約10年間で、野老さんのほ場を視察に訪れた人は2万人、講演回数は500回を越え、「稲の一生は人の一生と同じ」という野老さんの米づくり技術は地元地域だけでなく、県外まで普及していきました。

平成3年には「稲との語らい—私のコメづくり昭和史—」を出版しました。

「一事貫行」を座右の銘に、80才を越える現在も、気象変動に対応した稲づくりの研究実践は続いています。



〔稲を観察する野老さん〕

※最寄りの普及指導センター { 千葉県山武農林振興センター地域振興部改良普及課
住所：千葉県東金市東新宿1-11
TEL：0475-54-0226

<技術のポイント>

「コシヒカリ安定10俵どり栽培」技術の確立

1 コシヒカリ反収600kgを安定的に確保する、収量構成要素目標

- (1) m²当たり穂数 400本
- (2) 1穂当たり粒数 80粒
- (3) 登熟歩合 90%
- (4) 千粒重 22g

2 収量構成要素目標実践のポイント

(1) 健苗育成

◎活着が早く、下位から分けつする健苗づくり。1葉までの葉鞘長4cmで13cm位、3号分けつ（6葉出葉時に3葉目から分けつが始まる）がとれる健苗が理想。

- ①薄まき ②腰高にしないため、高温にし過ぎない温度管理
- ③移植前に葉色がさめ始めるよう、多すぎない育苗土窒素

(2) 早期有効茎確保

◎早く活着させ下位分けつを確保する。

- ①土を練り過ぎない耕耘と代掻き ②早く窒素を吸収できる施肥法
- ③栽植密度坪60株 ④1株植付本数4～6本 ⑤植付深度2～3cm

(3) 根の活力を保つ水管理

◎根腐れしない収穫まで根に活力がある水管理。

- ①活着までは深水管理 ②活着後は浅水で地温確保し分けつ促進
- ③生ワラ分解ガスの発生時はかけ流しで根に酸素を ④8.5葉期（田植え後40日・有効分けつ終了期）を過ぎたら間断灌水から中干しで根張りを確保
- ⑤出穂30日前から再び間断灌水 ⑥出穂後25日までは間断灌水で登熟を高める

(4) 適期穂肥

◎稲の観察と気象観測から生殖成長開始期を知り適期に施肥。

- ①葉令調査と気象観測で、コシヒカリの出葉数を予測 ②9葉期に葉色がさめ、25℃前後の気温で多日照の場合は減葉しやすい。減葉予測の場合はデンプンの蓄積期間が短くなるので、早めに穂肥を施し、粒数を確保する ③9葉期に葉色が濃く、低温で曇天が続く場合は下位節間が伸びて倒伏しやすくなるので、遅めに施肥する

(5) 病虫害予防

◎病気の出ない丈夫な稲づくりが一番大切。過繁茂稲は露切れが悪く病気が広がりやすい。葉が直立する草姿にする。

- ①適正窒素（9葉期に葉色がさめてくるように、多すぎない施肥）

3 食味向上と安定した米づくりは、稲の基礎体力の向上と地力向上から

——やっちはいけない稲の生理を無視した栽培管理10か条——

- (1) 基肥の多肥は、過繁茂と倒伏の原因
- (2) 極端な早植は生殖成長期までに葉色低下で光合成不足
- (3) 化学肥料に頼ったつなぎ肥は倒伏の原因
- (4) 中干し終了後の湛水は根腐れのもと
- (5) 遅い中干しは生殖成長期の水不足でモミ数減少
- (6) 早い多量の穂肥は、下位節間が伸びて止葉が直立せず光合成低下
- (7) 遅い多量の穂肥は、食味低下
- (8) 登熟期の窒素不足は、下葉枯れが早く千粒重低下
- (9) 早期落水は千粒重低下（出穂後25日以降）
- (10) 早刈りは未熟粒が多く品質と食味低下

4 植物のはたらき（水と養分の吸収と蒸散・光合成と呼吸）を熟知する

稲は根作りが基本。人も稲も酸素がなければ生きられない。

「備えあれば憂いなし」出穂前に稈と葉鞘に蓄えたデンプン蓄積量によって品質と収量が決まる。